

昼開けて海の楽屋は忙しく水平線よりまた船を出す

武藤義哉

海の向こうからこちらに向かつてくる船。今まで見えなかった船が水平線上にあらわれるのは、向こうにある楽屋からいま出発したからなのだ。「海の楽屋」という独自のイメージが、なんとも楽しい。

誰も居らぬことより人の気配することのおそろし

水口奈津子

水口奈津子

ちようど今月号に発表されているように、「セカンドフラッシュ」二十首で「心の花賞」を受賞した、いま脂の乗り切った作者である。この一首、「無」はおそろしくないが、「無」のようできてそこに「気配」があるのがおそろしいという。「気配」は『源氏物語』によく出てくる古い語。作者の目指すところが、新しさだけではないことが分かる。

ゆつくりとロープウェイの最終便夕陽あまねき空へ

と昇る

駕海洋子

大分の作者だから、ここに出てくるのは、たぶん別府湾を見下ろす別府ロープウェイだろう。真っ赤にあたりをそめる夕陽の中を、ゆつくりと昇ってゆくロープウェイの遠景。

対岸に街は広がり夏の陽のまぶしき犀川いまし渡ら

む

梅原ひろみ

金沢を流れる犀川と違って読んだ（他にも犀川はあるらしい）。「対岸に街は広がり」が、うまい。対岸の街と対照されることで、鮮明になる夏の犀川である。

短歌の現在

No.498 今月の14首を読む

佐佐木幸綱

一歩づつわれの踏みゆく石段の蹴込照らして朝日がのぼる
松橋雅実

石段をのぼるとか、石段を照らすなどと大雑把に言わずに、石段の細部を言葉化することで、日常的な世界と次元のちがう一首を仕上げている点に注目した。階段の水平な部分は「踏み面」と呼び、垂直部分を「蹴込」と呼ぶ。この一首「石段の蹴込照らして」とわざわざ細部を表現したことで、特色を出している。

雨の日の飛脚のやうな足取りでわれの主治医の先生が来る
北川秀子

作者の北川秀子さんは入院中だったが、七月二十五日に死去されたという連絡があった。おそろく七月十五日に投稿された今月分のこの詠草が最後の歌になるだろう。「雨の日の飛脚のやうな足取り」という細かい描写の、明るい、ユーモラスな味わいが心に残る。

闇深き木下に入りて今日ひと日われに憑きたる影を置きゆく
金 有美

樹木の陰に入って自分の影をその影の中に置いてゆく、という意味だろう。「憑く」という漢字が使われているように、自分の意志とはかわりなく、もののけが憑依するように執拗に自分に憑依してくる自分の影。その影から自由になる、そんな幻想である。

ひとりきて三千人とともにいる新盆なれば死者たちもいる
加古 陽

満員の日比谷・野外音楽堂に聞きにきた場面。「夜空から光のにわか雨が降るライブテープの銀のきらめき」